

新約単篇 使徒行伝の福音

言葉の力

使徒言行録 26 : 12 - 18

朗読しましたのは、タルソのサウロがあのだマスコ街道で光に打たれて地に倒れる場面……サウロが復活の主キリストと出会う生涯のコースを一変させられるところです。これは、使徒となったパウロにとって余程大きな意味を持った体験であった証拠に、この使徒行伝の中でも前後三回繰り返して語られます。

ここはその最後の、三回目の語りですが、この時は囚われの身となったパウロ自身が、ローマのユダヤ総督フェストゥスと、ガリラヤの王ヘロデ・アグリッパ二世の前で弁明する場面です。この1頁前の見出しが「パウロ、アグリッパ王の前で弁明する」、そしてこの見出しは「パウロ、自分の回心を語る」となっています。「回心」といいますのは、「心を回らす」と書いてありますが、人の生き方が180度変えられて全く別の生き方にされることを言います。実際には、主を信じていなかった人が、クリスチャンとしての信仰の生き方に変えられることです。しかもパウロの場合は、凶暴な迫害者からそのキリストの福音を伝える人になったのですから、これは神の手による奇跡であります。

皆さんは使徒パウロと呼ばれた人の、元々の名前が「サウロ」であったことをご存じでしょう。著者のルカが書いたギリシャ語のスペルで言うと $\Sigma\upsilon\lambda\omicron\varsigma$ です。日本語では「サウロ」と三字で表記するのが普通です。ところが、お気づきになったかどうか……このサウロの回心の場面で、キリストがサウロに話し掛けなされる時の言い方は「サウロ」じゃなく、「サウル」なんです。14節の2行目は、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』ですね。これは9章で著者が物語るところでも同じ「サウル、サウル」(9 :

4) ですし、22 章に出るパウロ自身の演説の中でもそうなっています (22:4)。新約聖書の中では必ずパウロでなければ、サウロと書かれるこの人の名が、あの光の中でキリストが親しくお呼び掛けになる所だけ、「サウル、サウル」なんです。

昔の人は、別にどうということはない小さな違いだと思って、無視していたようです。文語訳でも口語訳でもここは、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」でした。もちろん、文語の方は、「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するや」ですが……。でも、新改訳から以後は「サウル、サウル」と原文どおりにしてあります。本当を言いますと、この三箇所だけじゃなくて、めしいたサウロの目を開きにくるアナニアが、最初にサウロに呼びかける言葉が「兄弟サウル」ですね。この話は二回繰り返して語られますが、このアナニアの「兄弟サウル」という呼び掛けの所と、地に倒れたサウロに主が「サウル、サウル」とおっしゃる所とだけ五箇所、サウロじゃなくサウルなんですね。

サウル、正確にはシャウルというのはヘブライ語なんです。旧約の「サウル王」をご存じでしょう。サウロの名はあの名前と同じ名で、子供の時から שָׂאֹרָא と呼ばれていたのです。パウロはなぜ、その二つの出来事の時の呼び掛けだけ、そう覚えていたと思いますか。サウロは自分の母国語で…… “mother tongue” という、母の口から習った言葉で、自分の名を「シャウル、シャウル」と聞いたんですね。イエス様御自身がそうおっしゃった。これは、余程緊急の親身以上のメッセージだったのです。それはサウロの魂の底に届いて人生をひっくり返した位の呼び掛けです。それが、普通の共通語のギリシャ語の《 Σαῦλε, Σαῦλε, 》ではなくて、幼い時から母の口からいつも呼ばれた《 , שָׂאֹרָא , שָׂאֹרָא 》だったと言うのです。これだけはサウルは一生忘れなかった。

それに、アナニアが訪ねて着た時です。アナニアは迫害者で殺人者のサウ

口を敵として訪ねて来たのではなかった。イエスから召された「兄弟」として助けに来た。それだけでも驚きですが、その使者が呼び掛けた最初の言葉がなんと、「兄弟サウルよ」——《 Σαούλ ἀδελφέ, 》だった……と。これもやはりズシンと響いた筈です。それがやはり彼の“mother tongue”での呼び掛けだったと。

こういう「言葉が通じる」瞬間が、聖書の中には幾つかあります。復活の墓場でマグダラのマリアが、イエスにお目にかかる場面もそうです。「女よ。なぜ泣いているのか……マリア！」……「ラボニ！」《 רבוני 》これはマリアの生まれ故郷マグダラの言葉です。

四人の孫たちを見ていると、言葉が通じるようになるというのは不思議なものです。いまは祐二の番でして、2才のお誕生日も過ぎて三か月になろうというのに、飛行機が「ヒー」、虫が「シー」、自動車が「ブー」。頼り無いと言ったらないのですがでも救急車が「キッキッシャー」で段々二音節のも三音節のも出るようになった。それに、こちらの言うことは結構分かっているんですね。叱ったり注意したりするとフクれたり、突如ひっくり返って泣きます。そのうち真奈美や直人みたいにバアちゃんとお話ができるようになります。時間の問題。

ギリシャで3年ばかり住んでみて、面白かったのは、言葉が通じる筈はないと見ている間は、人間として見てないのですね。パンダかシマウマでも見るみたいに眺めて、品定めなんかしています。田舎へ行けば特にそうです。

「中国人は初めて見たよ」なんか言ってる。「中国人と違います。日本人ですよ」と一言言おうものなら、息が止まるくらいビックリして、「あっ、言葉話すよ……人間だ！」そこまで言いませんけど、それと同じ顔してます。田舎の人ですと、脅えたように黙ってしまいますが、町の知識人なら、そこから会話と交わりが始まります。皮膚の色も髪の毛も違うし低い鼻してるけど、人間だ。お互いの考えや感情が通じ合うんだ。杉山さんもやってると思

いますが、そこから友情が始まり、愛が始まります。相手の言葉を使って、相手の心に近付けたからです。下手でもいい。一所懸命、相手の言葉で心を注ぎ出す。

私の中国語はお粗末で、43年間錆びさせてしまっていますから、友人の中国人の方とでも恥ずかしいので、ほとんど日本語です。でも本当は9月には北京へ行きたいと思って、ほんの少しは復習していたんです。アテネの帰りにシンガポールで17時間。タクシーに乗りましたら、運転手は当然中国人です。「ここは福建語しか通じまい」と思ってましたら、カーラジオは北京語でニュースをやっています。聞いているんだから分かる筈だな……とは思いますが、勇気が出ません。ところが先方から英語で「お客さんは香港からですか？台湾の方ですか？」と尋ねてきたので、「いや私どもは日本の大阪からです。今ギリシャのアテネからの帰りです」とつい、中国語で言ってしまったら、「おや、中国語はどこでお習いになりましたか？」「実は、第二次大戦中に北京で……」「道理で綺麗な発音だと思った」……これで大満悦ですね。恐る恐るNHKテレビで勉強してきたのを実習してみる。すると運転手が、「お客さん、中国語を話すのなら、都心のOrchard Roadなんか行くよりも、チャイナタウンの方へお送りしましょう。その方が近いし、料金も安いですよ」ということで、スケジュールを急遽変更させられて、中国人街に降ろされました。予定主義者の私は不満でしたが、家内は「あの人はあんなに喜んで、好意的に近い所で降ろしてくれたんやんか」と言います。

赤道直下のカンカン照りの中を、ブツブツ言いながら、町の端から端まで一時間歩いて、やっと都心のOrchard Roadに着きました。おなかもすいたと思ったので、シアーワン（蝦王）という店に食事に入りました。海鮮と書いてありましたので、まあ魚料理専門の食堂です。ウェイトレスは皆中国人ですが、日本語で注文を取りに来ます。パリやロンドンでは幾分遠慮している日本人。この辺ではかなり我が儘で威張っているのだろうな……と思うと恥ずかしいような、気の毒なような変な気になりました。そうするとまた気

のせいで、先方のそぶりも「馬鹿な金持ちの日本人め……」と笑っているようにも感じられます。私のほうは少し日射病みたいで食欲も無かったものですから、あわびのステーキみたいのと野菜の盛り合わせを一つ、ご飯も一人前だけ取って、「外には……」と言うのを、「まあそれだけ」と断りましたら、「お済みになりましたら、また注文してください」と、まさかそれだけとは思わなかったのでしょうか。結局そのまま、それだけでお勘定を頼みました。こちらも「ケチな日本人……」と思われるような気遣いもあって、ついご愛嬌で、「今朝は遅く食べたのでね。あまり食べられなくて……」とつい中国語で言い訳しましたら、行きかけていた女の子が急に戻ってきて、「まあ、お客さん、中国語お話しになりますの……」と言うと、回りに合図して、二三人のウェイトレスが、こんどは表情もニコニコ顔に変わって集まってきました。こちらのレパトリーはプアーですし、ボロ出さないで早く切り上げて逃げ出さねばなりません。でも先方は後はもう日本語はやめで、お勘定の説明も何もみな中国語です。でもほんの二言三言しゃべっただけで、さっきとは顔が違うのですね。「よーし、いつか北京へ行くまでにもうちょっとやっておこう。」心が通じ合うまでにはまだ私の言葉では足りない。でもこれはギリシャで感じたものと同じです。もう一押しで心の扉が開く。

反対に、言葉が通じなくて、疑心暗鬼とか不安とか……考えなくて良いようなことが溜まってしまったような、バカバカしい経験もあります。スイスのチューリヒから乗りましたシンガポール行きのジャンボで、私どもはカウンターで窓際と聞いていたものですから、**H**と**J**の切符で窓際に座っていたのですが、本当の窓際の席は**J**じゃなく**K**なんですね。離陸直前になると、ちょっと日本人離れした容貌の東洋人女性が、不満そうな顔で通路に立って、上の記号と切符と見比べているのです。そのうち英語で「そこは間違っていると思います。私は窓際の席です」と言い出しました。知らぬということは強いものでして、「いや私どもが窓際ですよ。**H**と**J**。**I**は無いのですから」……要らぬことまで言っています。「いや、そこは**K**です。」最終的には、私どもが恥をかいて席をゆずったのは勿論です。ところがその小柄な女性は

壁に顔をすり付けて眠り始めた。これをしたくて窓際の席を買ったな……。

その上、それから後いろんなことが不可解なのです。食事の時間になるとその人だけ先に食事を持ってくる。それも僕らのと違うのですね。食事だけファーストクラスののだろうか……。食い物の恨みは恐ろしいと言いますが……。それに何度もスチュワーデスが伝言を持って来たり、ものを尋ねにきたり、VIP 扱いです。一体何者か？ 第一何国人だろう？ 英語で文句言って、一言も挨拶しないのは、これはシンガポールか香港の中国人か？ でも隣からそっと見た家内によると、カードに **Place of Birth : Tokyo** と書いてあったと言うのです。そんな筈はない。日本人なら、そんな失礼な態度を取ることはない。30 才くらいの女性です。

僕の推理。これは日航のスチュワーデスが非番で次の乗務地まで移動中なんだ。シンガポール航空も同業者の特別配慮をしている。大体スチュワーデスなら職業柄いつも笑顔をふりまいているから、非番の時だけでも仏頂面して神経休めているんだ。それにしても、あそこまでしなくとも良いのに、何と無愛想な！

家内はしかし、JAL の乗務員が SA で移動するだろうか……。それにスチュワーデスならもう少し背が高いはず、あれは違う。好きなこと言ってます。ところがついにヴェールは半分はげました。SA のスチュワーデスが彼女に “Miss Kakisaki” と言ったんです。やはり失礼な日本人なのだ。敵はひたすら壁に顔を付けて眠り、起きてる時はペーパーバックのドイツ語の小説を読んでいる。ドイツ語知らんのに、良くわかったもんですね。家内には読めなかったからドイツ語と言ったんですが、それが当たっておったのです。英語で文句だけ言って、ドイツ語読んで、一言も日本語をしゃべらず、ニコリともしない女。一体何者か……？

結局降りる少し前に、食事の済んだトレイを家内がパスして上げたときに

「すみません」と一言。見ろ、日本人じゃないか。

翌日シンガポール市内のツアーで同じバスに乗り込んで来ました。先方もバツが悪そうなら、私もイヤな奴だと思ってます。家内は私よりやさしいですから、ブキティマ高地の展望台でついにこちらから話し掛けて、二人でニコニコ話し始めました（ホットイタレ、モウ！）。何でも我々がヒソヒソ話をしている間、先方も必死で聞き耳を立てていたのですね。この隣の夫婦は何国人であるか……？ 今まで聞いた日本語というものと違う響きの言語を使っておる。こちらは早口の大坂弁でしゃべっていただけなんですけど、シンガポール直前になって、「ああ、これは日本語だ」と解読できた。実は娘さんは日本人とドイツ貴族との混血（「貴族」という所だけ消してください）日本語は得意じゃないのですね。とてもきれいな発音で正確に話されるのですけれど、テンポは日本で育った日本人より一拍だけ遅いのです。まして大坂語はやったことがない。これは無理ありません。やっと謎も解けてその後は、別れるまで気持ち良く話して、私も二言三言ドイツ語を使って、「せっかくお習いになったのに惜しい。もっと生かしてお使いになったら」なんか言われて、機嫌を直しました。他愛もないことです。言葉が通じないとパンダみたいに見られる……などと申しましたが、自分でも不信感と猜疑心と悪感情だけで人を見ているんです。パンダの方がまだ良いくらいですね。言葉が通じて、同じ言葉で人間として心が通じるということは本当に不思議なことです。言葉というのは相手の人の心そのものであり、相手の人の世界です。こちらの好意も、先方の温かさも言葉という不思議なチャンネルを通して交流します。

「言葉の力」という題を初めに掲げました。そして復活されたキリストが倒れ伏したサウロに《Σαῦλε, Σαῦλε,》と当時の共通語でおっしゃらずに、《, שְׂאוּל , שְׂאוּל 》と、彼の一番心の奥に届く言葉で語りかけなされたという話を、本人のスピーチの中から聞きました。その言葉が彼の魂を捕らえて、この人を殺人者からキリストの使徒に変えてしまいました。この 26 章の告白

には、強調のためはかなり乱暴な省略もありまして、何もかも全部その瞬間に受けたみたいに彼は言うておりますけれど、著者自身の補足がその倍以上ありますから、それを参考にしてまとめてみると、パウロが言いたいのは「何もかも、あの瞬間につながる」ということですね。私が命を賭けて、ユダヤ人に石で打たれて半殺しにされても懲りないで半生をキリストに捧げたのは、あの瞬間「サウル、サウル」とおっしゃったイエス様のお言葉がそうしたんだ。

私は決して、本当に心に届く福音の伝達をするためには、当地では大阪弁で説教しなきゃならないとか、そんなことを言っているではありません。また、沖縄の方言をマスターせねば金城さんの心には届かないとか、山本さんや岩浅さんの魂の底まで達する話をするには、東京の言葉をきれいに、黒田さんや大村さんに負けなくらい美しく話せるよう、必死で修練せよ……とか、そんな御愛嬌を言うのではない。でも言葉はどこかでそういう、サウルが聞いて、「あのとき俺に『サウル』っておっしゃったんだ」と一生忘れなかったような響きを持っていなければならないのでしょう。それは愛かも知れない。祈りかも知れません。一人一人の人を、あの瞬間のイエスの目で見、イエスのお心で包んでいなかったら、どんな言葉も、ただの冷たい音声にしかならないのでしょう。少なくともパンダやシマウマを見てちゃいけない。相手が心を開いてくれないからと言って、「なんだ、窓際のKの席いいことに、壁を枕に寝たまねしてる」とか、「ニコリともしないで、イヤな女だ。ドイツ語読むな！」とかですね。当方の好みに合わないから……、先方が頭下げないから……、常識も弁えないから……、だからこちらからは近付かない。それをこちらから変えなかったら、ついにそのドイツ人の娘さんとも心が通じ合うことはなかった。丘の上での楽しい会話も生まれなかったし、その人の魅力的な笑顔も印象には残らなかった筈です。

言葉というものは、必ずしも相手の“mother tongue”でなくてもいいから、「あっ、サウルと言ってくれた」と感じるような生きた言葉にならね

ばなりません。それはある意味で「言葉が形をとって命を持つ」ことであります。と言うと、最後の聖句……どこを読むか……すでにお気づきでしょう。ヨハネの福音書の初めの頁。新共同訳の初版では 189 頁です。

1. 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。 2. この言は、初めに神と共にあった。

ここの「言」というのは、あなたに向けられた神様の切なる思いです。あなたに分かって欲しい。あなたが大事だ。何を犠牲にしても、どんな痛みにも耐えても、この思いをあなたに伝えたい。

14. 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

私たち自身の「言」は、どんなに「肉となって」も、相手の罪を贖うことはできないし、死んだ者を生かす力はありません。でも、そんな力強い「言葉」を私たちは経験して知っています。その神の言であるお方が、私の所まで降りてきて、「サウルよ、昭よ！」と言って下さったのです。その神聖な感動を知る私たちの言葉は、イエス様という「言」の、ある意味での小規模な「複製」——ミニチュアみたいにはなれるものではありませんか。

(1989/11/05)

《研究者のための注》

1. 最後に引用したヨハネ 1 : 1, 2 と 4 については、ヨハネによる福音第 2 講「暗闇を貫いた光」、第 4 講「神を解き明かす」を参照してください。
2. サウロのヘブライ名は שָׁאוּל 「シャウル」ですが、これをギリシャ文字に移したルカは Σαούλ 「サウル」と綴っています。これはギリシャ語の音韻に“sh”に当たるものが無いからです。本文中では「サウル」とも「シャウル」とも読みました。
3. 使徒行伝 26 章の「パウロ、自分の回心を語る」の記事を 9 章の「サウロの回心」や

22章の「パウロ、自分の回心を語る」と比較すると、実際にはダマスコのユダの家でアナニアから聞かされた聖使命までが、すでにダマスコ街道上でキリストから直接与えられたように書かれている所が特徴的です。私自身の理解では、26章はパウロ回心の全出来事の文学的まとめで、ダマスコ城外で打ち倒された地点から、城内『直線通り』でのアナニアとの出会いと、アナニアを通しての啓示を含めて（アラビアや神殿も？）、その全部をひとつながりの出来事として、打ち倒されたあの一点に集約させた省略表現でありましょう。